

11—生きることは願うこと

お年よりの記

終の住み処

ああ わが廃家

人間が何が一番悲しいというたって、子に先立たれることじゃ。息子が四十九歳で死んだ。じいさまも七十五歳でそのあとを追うように死んだ。家計が苦しゅうなって嫁も働きに出るようになった。そんなとわしが血圧が高うて倒れた。五十年の春だね。一つつまずくと、次々と悪いこつが重なるもんだ。

竹田の病院に入院。ことばも身体も不自由となったが退院をさせられた。嫁は世話が出来ないといつて福祉事務所に頼んで、八月にここにはいることが出来た。

わしゃ何んも悪りいことをせんのに、何故こう辛いめに会うんじゃろうと、ベッドの中で夜通し泣いた。



三枝町子さん

憎うて憎うて

そんなうちにもつとはがゆいことが起った。嫁が他所へ縁付くというんじゃ。働きに行つたところで男を見つけて嫁に行くというて相談に来た。相談というより、もう決まったあと知らせに来たんじゃ。こげな口惜しいことがあるか。長男さえ死ななかつたら、わしは家でごいん居さんで暮らせたのに。嫁が憎うて、憎うてならなかつた。じゃが、わしは何んもいえんのじゃ。わしは動つききらんきになあ、何んも出来んきになあ。

そんなわしにホームから泊りがけの旅行に行こうというてくれた。それが、わしの在所の長湯の温泉じゃ、行つちみてえとおもうた。誰もおらん我が家が荒れているだらうか、どんげなつちよるか、心配じゃつた。

じゃが、わしはおむつをしちよる。おしつこが動くとすぐ出る。みんなに迷惑をかけるきになあ。ところが、思い切つて行つたら、寮母さんがよう世話してくれち、一ぺんもおむつを汚さんかつた。

次の日は、わしが道案内で長湯の町に行つた。わしの家にも行つた。庭のゆずが黄色にうれていた。それを見ると、無性に悲しゅうなつて、わしは声をあげて泣いた。

息子が生きていて、わしか嫁がいたら畠も荒らさずにするものをと、なつかしさと切なさで涙がとまらんじやつた。事務長さんが車から降りて、ゆずの実をもいでわしの膝に一杯抱かせてくれた。ゆずの香りがとてんうれしかつた。

盆、正月には大分の孫のところへ帰省する。嫁いだ嫁もその連れ合いと一緒に、わしの世話をしに来てくれる。これも因縁じゃ、と思うた。いま、わしは倅せじゃ。ここ、任運荘にいると、なーんも心配はねえきになあ。おむつだって汚れたらすぐ換えてくれるきに。(聞き取り)

五十年入居。八十一歳。苦難な人生を明るく生きる。

昼に想ふ

羽田野モモエさん

黙ねんと 床に座りて 空仰ぎ

のびのびと 手足のばして このベッド ねんねんころりや 任運荘に抱かれ

ひとことで はいと返事の 心地よさ

書きつくし 思ひつくして 言うことなし お迎へある日 待つばかり

まぼろしの 影を追ひつつ 今日も行かぬ 明日も行かぬ

五十八年入居。九十六歳。「うたは子や孫に残してやれる私の財産」と。詠んだうたは二百首余り。

おまかせします

藤田フミ子さん

十年一昔と言うけれど、ぼけーとして居る間に、何と十三年もたってしまった。家で一人暮らしをしていましたが、体が弱ってきました。役場の人から車を出すから、「見るだけでもいい、見に行こう」とすすめられました。任運荘をみて、「ここなら辛^いぼう^うできる」と、決めました。妹夫婦は泣いてとめてくれましたが、私のような自由者はこれが一番よい事だと心に決めていました。

若い時の苦勞が今、やっとむくわれた気がします。今の私は幸^いせ者^者です。お^い、や^めい^いになるとそれぞれの生活があるので、あてには出来ません。でも、今の私には全部をゆだね、何もかもおまかせできる任運荘があります。

五十年入居。享年七十三歳。「病気になっても入院は

させないで」と言っていた藤田さん。昨年^の十二月十九日、夜勤寮母に見守られて安らかに旅立たれた。ご意見番として貴重な方だった。

はがゆうじ

白石キヌエさん

昔しゃ、今んごとねえじ、元氣もよかった。ここで、くじゃくを飼うちよったき、えさやり、ふんの片付けまじ、全部わしが一人じ責任を持ちしよった。若けえ頃から、私しゃ動物が好きじ、牛飼いをしよった。牛飼いじゃ金賞やら銀賞やらメダルをいっばいもろうた。とり飼いはたのしゅうじ、一生懸命しよった。

ある時くじゃくが戸をあけたとたん逃げ出し、向こうん山に飛んじ行った。他ん者はだあれも助けきらんかった。私しゃ、「くうよ、くうよ、早う帰っちこんか、お前ん家はここん任運莊じゃねえか。わしを忘れたんか、くうよ、くうよ」ち、力ん限り呼びよたら、向ん山かい、バタバタ羽根をいわせち、わしん所に帰っち来たんじゃ。あげんうれしいこつは、とりを飼うたもんじゃねえと分からん。鳥の糞じ野菜を作っち、キュウリやらナスビやら植えち、皆じ、食べたじゃねえですな。皆で喜んじ食べたじゃねえな。わすれたんな？

「刃物はねえかのう」

おしぼりたたみ、おむつたたみ、ちりとりに入るる袋やら、何でんしよったんで。そうじゃけんど今は、何をしちいいか、どげえすりゃいいんかさっぱり分からんごとなった。元氣のいいもんが何でもかんでもしよるのを見ると、わしは、はがゆうじたまらん。情けのうじ、たま

らんのじゃ。昔、わしが、何でも出けよった時おった寮母さんは、わしんことを、よう知っちゃるけど、わしが何も分からんこつなちから来た寮母は、わしんことをわかっちゃらんじゃ。こんわしが、どんくれたためになつた人間か、あんたなら分かちくるるわなあ。それが、はがゆうて、情けのうでたまらんのじゃ。

でけんことは手伝うちくるるといふけん、でけんき頼みよるんじゃ。そげえしちくるんがせつから、しちくれんじい。もう私しや死んだ方がいい。じゃけん、わしが死ぬりや、困るのはお前どうで、おれどうんおかげじ、ぜにをもらいよるくせに、人をばかにしち、おれんようなもんは早よう死にゃい思うちよるんじゃろう。おれが死にゃ、警察にひっぱらるんのはお前どうで。

△宥めながら、喉が渴いたただらうからとジュースをすすめ、上着をきせようとすると▽

ほっちよいちくれなあ。喉もかわかん。こげえ腹が立っちよっち、寒いなんか思うな？どっか切れ物はねえかのう。それじ喉をつきゃ、すぐ死ぬるんじゃが…どっか、引き出しん中に入っちよるじゃろう。どうせ、私しやっかいもんにされちよるんじゃきな。死んだほうがいいんじゃ…。△身も世もなく泣きじゃくる▽（聞き取り）

五十年入居。八十三歳。在所者の中で一番古い方。最

近は心身とみに弱られた。

履歴書

中田清馬氏

大正四年一月一日 四人姉弟の三番目の長男として大野郡清川村に生まれ、今年七十三歳になります。村一番の小さな百姓でした。

大正七年 四歳の時母が亡くなり、翌年新しい母を迎えましたが、かわいがってもらえず淋しかった。でも三年後に離婚し、翌年に、また新しい母がきました。その母と父との間に妹が二人生まれました。母にはかわいがってもらいましたが、学校には妹をおぶって行ったこともあります。

高等小学校卒業 農業学校に行きたかったが、家の農業の手伝。栗やスイカ、トマトを作りました。スイカはとももうかりました。

昭和十一年 妻を迎え、三男三女が生まれましたが、長女は嫁ぐ前に死亡、十九歳でした。

昭和十三年 日支事変に召集され、十六年に帰りました。

昭和十九年 また大東亜戦争に行き、二十一年三月に帰りました。帰って少し土地を借りて、タバコを作り、お金になりました。

昭和四十年には、タバコで大きな収入を得るようになりました。長男に嫁をもらい、夫婦にまかせたが、うまくいきません。

昭和四十二年 それで、私は二年間出稼ぎに行きました。

昭和四十四年 帰ってみると、長男夫婦は百姓ぎらいで、家をでました。でも、また家に戻りました。それからは夫婦頑張ってくれたので、旅行に行ったり、魚釣りなどをしました。

昭和五十七年 妻が亡くなり、私は好きな酒のために転倒し、全身不自由となり、病院生活を一年五ヵ月ぐらいました。入院中、文化祭が行われている任運荘を見学し、自分から入所を希望しました。

昭和六十一年 ここに入所しました。不自由な体ですが楽しく生活しています。(聞き取り)

五十九年入居。七十三歳。老いて今 思い残りはな
けれども 生きたくもなし 死にたくもなし。一昨年の
敬老の日に詠まれた。わずかに動く手を使い、自ら毎日、
リハビリに励んでいる。

ここに決めた

後藤スエ子さん

昭和三十三年にがんの宣告をうけ日赤病院へ入院しました。病気よりも、他の人の前で用を足すのは死ぬ思いでした。いつも、がまん、がまん、がまんと自分にいきかせました。任運荘に来て

驚きました。カーテンがあるのです。用を足す時も夜やすむ時も寮母さんがカーテンを引いてくれるのです。夜、カーテンがひかれると、ホッとします。自分の家に帰ったおもいです。本をよんだり手紙を書いたり好きなことが気がねなく出来ます。一ぺんに病気が治ったおもいでした。

この分なら家に帰って主人と暮らせると、朝早くから歩く練習をしてがんばりました。はじめての正月帰省は主人の手も借りずに、椅子を押ししたりして一日を過ごしました。

ところが、一寸したことで転び、こんどは這って用足しをしなければなりません。主人から「帰らんでもよいのに」と叱られました。ああ、情けない。もう、家庭復帰は思わぬことになりました。今年の盆帰省はタクシーでお墓におまいりをしただけです。

病院通いをしていた主人も養護老人ホームにはいりますが、僅かの間で退去して、また一人暮らしです。そんな主人のところに帰っても共倒れになるばかりです。それに、もっと悲しいことが起りました。息子の嫁に先立たれたのです。男の子二人残して。頼みにしていたあの嫁が。私の死に場所は任運荘です。

五十六年入居。七十八歳。「任運大学」の開設を提唱したり、おしぼりたたみなどの奉仕活動に、積極的に取り組んでいる。

折々のうた

句や歌は開所当初からにぎやかに詠まれていた。サークル活動もうたの会が一番先に生まれ
た。春秋移ろう中に、人は去り、お年よりの衰え著しく、サークル活動もしたいに下火になる
中で、うたの会だけは衰えない。現在五十人のうち三十六人がベッドの中で詠み続けている。
つぶやくように並べる言葉が、そのままうたになっている。ホーム暮らしのせいだろうか。
寮母たちはそれをうたとして書きとめていく。心の底からの声だからである。これらのうたは
毎月の「任運大学」で発表される。

重い痴呆の高峯さんは自分の名前が出ていないと、分かるのかそわそわし出し、席をぬけ出
し、寮母室に来て、「先生、私のうたを作って」と。居合わせる寮母は質問して、幾つかの言
葉を引き出し、それを並べて、ハイできあがり。その日はお盆からかえって間がなかった。
「盆帰省姉と二人で墓参り登る坂道息もたえだえ」発表会の終わる頃やっとなににあう。

以下、古い順に五十数首を。※は今亡き人。

十五夜の 枝豆食べて 里の味

大津キカヲ氏※

刈りたての 芝生の上で 古い人の まり投げ遊ぶ 子らの如くに

赤星スミ氏※

朝起きて 病める足をば ふみしめて 東と西の 芝生歩かん

白石作馬氏※

いてえやら せちいやら おまえ きついやら

後藤シズエ氏※

盆の日に接待できぬ身のつらさ

祖母や母と雛を飾りし夢の宵

あれほどに帰りたいと思つたに住めば都よホームのよさよ

久しぶりバスに乗りたる吾なれば右に左に見る忙しさ

船に乗りさぬきの金比羅詣りたい

若い時お詣りしたよ行きたいね

百姓もしていないのに来ん娘

帰る朝息子に抱かれて湯あみする

さまざまな思い出残る年重ね百の祝いを迎えるうれしさ

孫の名を呼びつつ花を摘みにけり

傷つきし心は今もいえもせず老いの身となりホームに暮らす

子や孫に会いたさゆえに生きつづく

ホームの柿も色づいた家の柿も熟れただろ子供のことと思ひ出す

五月祭じいさん炊いた豆ご飯二人でのんびり昼のひとつとき

中庭と同じ広さの青空に鳥が二、三羽飛んでいく

流れくるソーメン取るのが好きだけど手がかのうたらと心ははやる

淋しさは年とるごとに深まりて不自由なればさらに身にしむ

甲斐ユミ氏※

高山ヨシ氏※

工藤ツネ氏※

佐藤久盛氏※

首藤由松氏※

亀井イト氏※

中村フサ氏※

佐藤ヨリノ氏※

森崎夕子氏※

後藤マツ氏※

大津キミ子氏※

仲井マサヲ氏

古庄トミ氏

和田キミ氏

秦タカオ氏

工藤綾氏

佐伯キミ子氏

せちいことは何にもないよなんもない

敬老日 生きて行きたし 百までも

仏さま 日帰り参りで、眼をまわす

地藏さま 冬は冷たく 雪化粧

ホーム暮らし 少し馴れたよ ごはんもうまい

正月に おもち食べたよ 孫たちと

久し振り 帰って見れば 盆栽の 手入れとどかず めちゃめちゃなり

若い時 一べん行った 用作もちやくの もみじは今も 美しかろう

だんだんに 体弱りて 辛き夜 寮母さんの声に 涙わくだけ

一町も つくりし 田畑 今はなく 人手にわたり 心淋しき

お正月よその娘の 晴着みて 子なきをなげきし 今は亡き夫

節分に 思い出すは 子ども等の 元氣にかける 姿なりけり

生まれきて はじめての旅 赤い牛

ここが一番ええけども 孫を待つ

窓ぎわの 部屋にかわりて ケシの花

木蓮の 花の多くて ぬくい春

牛飼いをしたのもなんも おぼえちよらん

首藤カツ氏

河原茂一郎氏

姫野ハル子氏

津島フミエ氏

中野タカオ氏

橋本忠重氏

板井 初氏

古庄直人氏

佐藤 明氏

三宮ツユ子氏

上田末子氏

宮本ツヤ子氏

合沢右八氏

阿地コトエ氏

児玉マサ子氏

片山キヌ氏

西 東氏

チューリップ 春をさかりと咲き競う

ここの水とてもおいしい 帰りたくない

ぬくなれば 畑のこじり 掘りあげて 休みもなしの 遠き思い出

若き日に 商いあきな繁昌 ころころ燃ゆ

ぼた餅を 食べて知る 彼岸かな

遠い日に ぎんなんいっぱい 拾ったよ

夏の日 に ソーメン 食べてうれしいな

七夕や 風の吹くのに ひらひらと

俳句など つくることなく 年をとる

ホームにて シャミ線ひけるは 夢のよう

俳句やら 詠んだは みんな 忘れたよ

はじめの 誕生祝いに 涙でる

孫を連れ 面会の妻 待ちわびる

大声で 子の名を呼べば 気持ちいい

五月祭 「いいな いいな」と 夫を待つ

西千代子氏

三代ヒサ子氏

森田エキ氏

高橋ミチエ氏

引田シゲ子氏

三代スズエ氏

野仲シズ子氏

江藤 允子氏

三代スズシ氏

津田シゲル氏

後藤 スエ氏

高羽 倉夫氏

古庄志義男氏

和田 スエ氏

佐藤ナミ子氏